菅原道真研究

――『菅家後集』全注釈（五）――

焼山廣志

一

前回[1]に引き続いて『菅家後集』の全注釈を試みたい。今回は調査・考察を済ませた『菅家後集』「507風雨」「508燈滅二首―一」「509燈滅二首―二」の三首を二章以下で取り挙げてみる。注釈を進める上での「凡例」を次に示して本論に入りたい。

凡例

一、底本には、川口久雄氏が岩波古典文学大系本に採られている「前田家尊経閣所蔵本」を用いた。

一、原詩のみ正字で載せ、語釈・通釈等は現代かなづかいを用いた。

一、注釈にあたり、菅原道真の『菅家後集』の作品番号は、川口久雄校注、岩波日本古典文学大系本のそれにならい、参考として引用した嶋田忠臣の『田氏家集』の作品番号は、内田順子編『田氏家集索引』に拠り、紀長谷雄の漢詩文の作品番号は三木雅博編『紀長谷雄漢詩文集並びに漢字索引』に拠った。又、白居易の『白氏文集』の作品番号は花房英樹著『白氏文集の批判的研究』のそれにならった。

一、校異に用いた諸本は以下のように略号で示す。順不同。

写本

（尊一）……尊経閣所蔵本（一）　一冊《底本》
（尊二）……尊経閣所蔵本（二）　一冊
（尊三）……尊経閣所蔵本（三）　一冊
（尊四）……尊経閣所蔵本（四）　一冊
（内一）……内閣文庫本　（一）　一冊
（静嘉）……静嘉堂所蔵本　一冊
（大島）……金沢大島文庫本　一冊
（加越）……金沢加越能文庫本　一冊
（太一）……太宰府天満宮所蔵本（一）　一冊

（太二）……太宰府天満宮所蔵本（二）　一冊
（松平）……島原松平文庫本　一冊

刊本

（金沢大）……金沢大学所蔵本　一冊
（中之島）……大阪府立中之島図書館所蔵本　一冊
（九州大）……九州大学所蔵本　一冊
（京都大）……京都大学所蔵本　一冊
（筑波大）……筑波大学所蔵本　一冊
（東北大）……東北大学所蔵本　一冊
（東洋大）……東洋大学所蔵本　一冊
（書陵部）……書陵部所蔵本　一冊
（舞鶴）……舞鶴中央図書館所蔵本　一冊
（鈴鹿）……鈴鹿文庫本　一冊
（住吉一）……住吉大社所蔵本（一）　一冊
（住吉二）……住吉大社所蔵本（二）　一冊
（多和）……多和文庫本　一冊
（三手）……三手今井所蔵本　一冊
（島根大）……島根大学所蔵本　一冊
（内閣一）……内閣文庫本（一）　一冊
（内閣三）……内閣文庫本（三）　一冊
（内閣四）……内閣文庫本（四）　一冊
（川口）……石川県立図書館川口文庫本　一冊

一、平仄の表記には、平声に○、仄声に●、韻字に◎を用いた。
一、語釈等で主に利用した辞典は諸橋轍次編『大漢和辞典』及び漢語大詞典編輯委員会・漢語大詞典編纂『漢語大詞典』である。

二

本文　平仄

507 風*雨
朝朝風氣勁　○○○●●
夜夜雨聲寒　●●●○◎
老僕要綿切　●●○○●
荒村買炭難　○○●●◎
不愁茅屋破　●○○●●
偏惜菊花殘　○●●○◎
自有年豐稔　●●○○●
都無叶*口飡*　○○●●◎

＊脚韻は上平声寒韻。韻字は「寒・難・殘・飡」

校異

○題字下「五言」…（内一）（大島）（太二）　刊本　全本
○叶（●）…計（●）（尊二）（尊三）（尊四）（内一）（大島）

（太一）（太二）　刊本　全本

○頭注「計作叶」…（大島）

○飡（○）…飧（○）（尊三）（尊四）（内一）（大島）（太一）

（太二）　刊本　全本

訓読

・朝朝　風氣勁し
・夜夜　雨聲寒し
・老僕　綿を要むること切なり
・荒村　炭を買ふこと難し
・茅屋の破るることを愁へず
・偏に菊花の殘ふことを惜しむ
・年豐の稔り有れども
・都べて口に叶ふ飡無し

通釈

・毎朝毎朝肌をつきさすような強い風が家を吹き抜け
・夜では夜に、屋根を打つ雨音が身にしみて寒く感じる
・老いた家僕は（寒さが身にしみると言っては）綿をしきりに所望する
・私の住むこの近辺では暖房用の炭を求めることすらままならない
・日に日に強まる風雨によってあばら屋が破損してしまうのはまだ我慢できないこともないが
・大切に育ててきた菊花がこの風雨でいためつけられることには耐えられない
・今年は囲りは豊作の様呈を見せているのに（食料は十分なはずなのに）
・この私には何一つ口にあう食材を求めることも出来ない

語釈

○朝朝…毎朝。旦旦、『漢語大詞典』では「天天、毎天」と説明し「孟浩然、留別王維」の「寂寂竟何待、朝朝空自歸」の句をひく。「元稹」の「酬樂天赴江州路上見寄三首」に「朝朝寧不食、日日願見君」の句が見える。同じく「竹部（石首縣界）」に「朝朝冰雪行、夜夜豺狼宿」の句が見える。『白氏文集』「665長安閑居」に「無人不恠長安住、何獨朝朝暮暮閑」の句が見える他、白詩にはこの語が多く見られる。

○風氣…風をいう。『漢語大詞典』では「指空氣和由空氣流動而生的風」と説明し、『文選』「宋玉・風賦」の「其所託者然、則風氣殊焉。呂向注、雖同託戸穴、其於清濁亦殊矣」の例を挙げる。『菅家後集』「485秋夜　九月十五日」に「月光似鏡無明罪、風氣如刀不破愁」の句が見える。

○勁…つよい。たけだけしい。猛烈な。【勁風】はつよい風。剛風。猛風の意。『文選』「潘岳、秋興賦」に「勁風戾而吹帷」の例がある。又【勁氣】ははげしい気象。又、風気の意。「陶

潜」「癸卯十二月中與從弟敬遠詩」に「勁氣侵襟袖、箪瓢謝屢設」の例が見える。

○夜夜…よなよな。毎夜。『白氏文集』「0040慈烏夜啼詩」に「經年守故林、夜夜夜半啼」の句が、又「1201獨眠吟二首ー二」に「獨眠客、夜夜可憐長寂寂」の句が見える。『菅家文草』「210客舎冬夜」に「客舎秋徂到此冬、空床夜夜損顔容」の句がある。

○雨聲…雨のひびき。「杜甫・晴詩」に「雨聲銜寒盡、日氣射江深」の句が見える。『白氏文集』「1369孤山寺遇雨」に「拂波雲色重、灑葉雨聲繁」の句が、又「3281秋雨夜眠」に「卧遲燈滅後、睡美雨聲中」の句が見える。

○老僕…年をとったしもべ。『漢語大詞典』では「年老的男佣人」と説明する。『菅家後集』「484敍意一百韻」に「鳥路惣鷹鶻、老僕長扶杖」の句が見える。川口久雄氏は岩波古典文学大系本の補注で「伝説によると、味酒安行という者が京より隨行し、道真の死後五十余年で他界した。晩年白髮白髯の人だったので、白大夫と称し、今も太宰府の末社に祀られる。しかしこれは白女とか白比立尼とかいう類の一種の長寿者伝説で、道真の悲劇の生涯を講釈して語り歩くものがあったのかもわからない。五○七に〈老僕要綿切〉とある人と、ここの老僕はおそらく同一人」（七二九頁四八四補注〔三〕）と説明されている。

○荒村…荒れた村。『漢語大詞典』では「亦作〝荒邨〟偏僻荒凉、人煙稀少的村落」と説明し、「五代李中・春日野望懐故人詩」の「暖風醫病草、甘雨洗荒村」の用例を引く。『白氏文集』「0786病中得樊大書」に「荒村破屋經年卧、寂絶無人問病身」の句が見える。『田氏家集』「79題東郭居」に「東郭窮居且莫論、身閑猶合愛荒村」の句がある。又『菅家文草』「314野村火」に「非燈非燭又非螢、驚見荒村一小星」の句が、「269寄白菊四十韻」に「含情排客館、抱影立荒村」の句が見える。

○茅屋…かやぶきの家。茅宇。質素をあらわす語。『漢語大詞典』では「亦作〝茆屋〟用茅草盖的房屋」と説明し、『左傳』「恒公二年」の「清廟茅屋、杜預注、以茅飾屋、著儉也」の用例及び、「杜甫・春日江村詩之一」の「茅屋還堪賦、桃源自可尋」の句を引く。『白氏文集』「886題王處士郊居」に「負郭田園八九頃、向陽茅屋兩三間」の句が、又「3521洗竹」に「小者截魚竿、大者編茅屋」の句が見える。紀長谷雄の「4山家秋歌」に「秋水冷暮山清、三間茅屋送殘生」の句が見える。『菅家文草』「321閑居」に「茅屋三間竹數竿、便宜依水此生安」の句が、又『菅家後集』「497種菊」に「青膚小葉白牙根、茅屋前頭近逼軒」の句を見出すことが出来る。

○自…～といえども。もし～としても。『漢語大詞典』では「連詞・(1)雖。即使」と説明し、『荘子』「列御寇」の「自是有德者以不知也、而况有道者乎」の例、及び「杜甫・日暮詩」の「風月自清夜、江山非故園」の用例を載せる。

○年豐…穀物の実の良い年。五穀豊熟の年。豊歳。『漢語大詞典』では「謂年成豊収」と説明し、『左傳』「桓公六年」の「奉盛以告日、潔粢豊成、謂其三時不害而民和年豊也」の例を引く。

『白氏文集』「2376贈侯三郎中」に「年豊最喜唯貧客、秋冷先知是瘦人」の句が見える。『菅家文草』「25喜雨詩」に「暗記年豊瑞、先知井邑雍」の句が見える。類義の【豊年】の用例が、紀長谷雄の「52春雪賦」に「適在遲日之可楽、還知豊年之到瑞」と見える。

○叶…かなう。和合する。【叶口】は「口にあう」の意。

○飡…飧・飧。食事・晩の食事・火を通して煮た食物。『漢語大詞典』には「指晩飯」と説明し、『孟子』「滕文公上」の「賢者與民並耕食、饔飧而治」の用例を載せる。

○頭注「無七言二字」…（大島）

○迹（●）…跡（●）（尊四）（内一）（大島）（太一）（太二）（松平）

刊本 全本

刊本 全本

三

本文　平仄

508 燈滅二絶—一

脂膏先盡不因風　○○●●●○◎
殊恨光無一夜通　○●○○●●◎
難得灰心兼晦迹　●●○○○●●
寒窓起就月明中　○○●●●○◎

脚韻は上平声東韻、韻字は、風・通・中

校異

○題字下「七言」…（尊四）（内一）（大島）（太二）（松平）

訓読

・脂膏　先づ盡きて　風に因らず
・殊に恨む　光の一夜の通すこと無きことを
・得難し　心を灰にすると迹を晦すと
・寒窓　起きて就く、月明の中

通釈

・燈が消えてしまうのは、油が尽きてしまうからであって、決して風のせいなどではない。
・とりわけ無念なのは光が一晩中照らし続けてくれないことである。
・今の私には心を灰のようにして無心になることも（灯が消えて闇に入るようには）世間から逃れ、隠者のような生き方は、求める術とてない。
・（光が消え闇となった）寒々とした深夜の窓辺に起き上がり、身を寄せ月明りの中で一人たたずむのである。

語釈

○脂膏…生物のあぶら。脂肪。『漢語大詞典』には「㊀油脂」と説明し、『禮記』「内則」の「脂膏以膏之、孔穎達疏、凝者爲脂、釋者爲膏」とあるを引く。生物のあぶらで、凝ったものを「脂」といい、溶解したものを「膏」と説いている。『菅家文草』「380賦雨夜紗燈、應製」に「毎憶脂膏多渥潤、那勝恩澤繞身來」の句が見える。

○因風…風によって。風が原因で。類似の用例として『菅家文草』「276客居對雪」に「花散忽因風力處、玉銷初見日光時」の句が見える。

○殊恨…とりわけ残念なのは。特に恨めしく思えることは。『菅家文草』には、「171水鷗」の「殊恨秋天暮、相離不敢親」の例、又、「196秋」に「夜深山路樵歌罷、殊恨隣鷄報曉遲」の用例等が散見する。

○一夜…一晩。或る晩。『漢語大詞典』では「一个夜晩。一整夜」と説明する。ここでは「一整夜」の意である。「一晩中ずっと」と解すべき語。『白氏文集』「875江上吟元八絶句」に「大江深處月明時、一夜吟君小律詩」の句が、「1200獨眠吟二首―一」に「十五年來明月夜、何曾一夜不弧眠」の句が見える。『田氏家集』「87夢高侍郎」に「金○失契十餘年、容鬢宛然一夜眠」の句が見える。『菅家文草』「276客居對雪」に「城中一夜應盈尺、祝著明年免旱飢」の句が見える。

○灰心…欲望を去って何物にも誘惑さえない心。平静で無心である心。(『漢辞海』) 『漢語大詞典』では、「謂悟道之心、不為外界所動、枯寂如死灰」と説明する。『荘子』「斉物論」の「形固可使如槁木、而心固可使如死灰乎」に基づく語。「五代・斉己〈閉門詩〉」に「外事休關念、灰心獨閉門」の用例が見える。『白氏文集』には類似語をあわせて二例見える。「807渭村退居寄禮部崔侍郎翰林錢舍人詩一百韻」に「泥尾休搖掉、灰心罷激昂」とあるのと、既に、金子彦二郎氏が白詩と道真の詩との類似を指摘されている作品「1024贈韋鍊師」の中に「潯陽遷客爲居士、身似浮雲心似灰」の句が見える。(『平安時代文学と白氏文集』―道真の文学研究篇第二冊―三九九頁) 前の白詩の例は「心を灰のように無心にして」の意で、後の白詩の例も「心は灰に似て少しの俗念も無い」の意で用いられている。『菅家文草』の中で「215早春閑望」と題する詩の一、二句目に「早起灰心坐、冥冥是夢魂」の用例が見える。前述したようにこの語は『荘子』を出典する無欲の境地を意味するものだが、「灰心」の「灰」が、詩題の「燈滅」の関わりから、燈火の消えた跡の「灰」の意を重ねる語となっている。

○晦迹…隠居して匿れること。『漢語大詞典』では「亦作〝晦跡〟謂隠居匿迹」と説明し、「南朝、梁沈約〈郊居賦〉」の「僑棲仁於東里、鳳晦迹於西堂」の句、及び「杜甫・岳麓山道林二寺行詩」の「昔遭衰世皆晦迹、今幸樂國養微軀」の句を引く。紀長谷雄の「25後漢書竟宴」に「逃名如得身巣穴、晦跡終辭世垢紛」の句が、同じく「54風中琴賦」に「風之晦跡 和而不同」

の句が見える。

一方、この「晦迹」の「晦」には「①日が暮れたり、物におおわれたりして暗い」の意や「②かくれてはっきりしない」意（『漢辞海』六七九頁）が含まれており、詩題の「燈滅」と関わりのある用字として使われている。

○兼…〈接続語〉～と～と〈並列関係を表す〉（『漢辞海』一四七頁）「韓愈―詩遺興」に「莫憂世事兼身事」の例が見える。

○寒窓…冬の窓。寒窗。寒々とした窓。『漢語大詞典』では「亦作〝寒牕〟。寒冷的窗口、常用以形容、寂寞艱苦的讀書生活」と、より具体的な説明をし、「元稹・聞楽天授江州司馬詩」「垂死病中驚起坐、暗風吹雨入寒窗」の例を挙げる。類似表現として『菅家文草』「318庚申夜、述所懐」の中に「故人詩友苦相思、霜月臨窓獨詠時」といった句を見出せる。この「寒窓」の「寒」も、詩題「燈滅」との関わりを響かせる用字として使っていると思われる。

○就…つく。おもむく。（『漢辞海』四二四頁）寄りそってつく。身を寄せる。（『新字源』一二六五頁・同訓異義「つく」）「韓愈・祭十二郎文」に「既又與汝就食江南」の用例が見える。ここでは、寒々とした窓辺に月明りを求めて「我が身を寄せる」のである。

○月明…月が明るい。明るい月夜。「杜甫・秦州雑詩」に「月明垂葉露、雲逐渡溪風」の句が見える。『漢語大詞典』では「月光明朗」と説明し、『白氏文集』「崔十八新池詩」の「見底月明夜、無波風定時」の句を引く。白詩には外に「680江樓望歸」に「満眼雲水色、月明樓上人」の句が、「700宿樟亭驛」に「夜半樟亭驛、愁人起望鄉、月明何所見、潮水白茫茫」の句等数多くの用例がある。『田氏家集』「25聽左將軍彈琴」に「知道君應彈取盡、禁鳥聲絶月明中」の句が見える。紀長谷雄の「32夜陰歸房」に「空夜窓閑螢度後、深更軒白月明初」の用例が、又同じく「54風中琴賦」に「及夫天秋霜曉、夜涼月明」の例が見える。『菅家文草』「341就花枝、應製」に「勤王竟夕月明前、便就花枝不放眠」の句が見え、「376翫梅花、應製」に「隨處有梅惣可憐、不如獨立月明前」の句が見える。

四

本文　　**平仄**

509　燈滅二絶―二

秋天未雪地無螢　○○●●●○◎
燈滅抛書涙暗零　○●○○●●◎
遷客悲愁陰夜倍　○●○○○●●
冥冥理欲訴冥冥　○○●●●○◎

脚韻は下平声　青韻、韻字は、螢・零・冥

校異

写本・刊本とも無し。

訓読

・秋天未だ雪あらず、地に螢無し
・燈滅して書を抛てば、涙暗に零つ。
・遷客の悲愁、陰夜に倍す
・冥々の理　冥々に訴へんと欲す

通釈

・秋の空にはまだ雪は降らないので、晋の孫康のように雪の光で書を読むこともままならず、一方、地上ではもう螢もいなくなり晋の車胤のように螢の光を集めて書を読むことも適わない。
・とうとう灯明が消えてしまい、読みかけの書を投げ捨てると、涙が自と流れ落ちる。
・左遷の憂き身の悲しみは（灯明も消え）月も出ていない暗夜には、とりわけ深まるものである。
・この胸奥くわだかまったまま誰にも話せない事の真実は、はるかなる天に解き明かしてもらいたいと切に願うばかりだ。

語釈

○秋天…秋の空。秋旻。『漢語大詞典』には「秋日的天空」と説明する。『白氏文集』「396秋霧中遇尹縦之仙遊山居」には「秋天床席冷、雨夜燈火深」の例、「451夜雨」に「秋天殊未曉、風雨正蒼蒼」の句等多く見える。『菅家文草』「164薄霧」に「暗記秋天事、閑居獨自吟」の句が見える。『文華秀麗集』「139神泉苑九日落葉篇」に「寥廓秋天露爲霜、山林晚葉併芸黄」の句が見える。

○螢…→ 補説

○雪…→ 補説

○抛書…書物を投げ捨てる。「抛」は「投げうつ。投げ捨てる」の意。

○暗…暗に。人知れず。こっそり。ひそかに。

【暗涙】人しれぬなみだ。忍んで泣く涙。「賈島・秋暮詩」に「白鬚相並出、暗涙兩行分」の用例がある。（『大漢和辞典』巻五―九二〇頁）

○遷客…罪を得て遠方へ流された人。左遷流謫された人。『漢語大詞典』では「指遭貶斥放逐之人」と説明し、「南朝・梁江淹・恨賦」の「或有孤臣危涕、孽子墜心、遷客海上、流戍隴陰」の句の用例を載せる。『菅家後集』の中では「480聞旅雁」に「我為遷客汝來賓、共是蕭蕭旅漂身」の句が、又「500雨夜」に「農夫喜有餘、遷客甚煩懣」の句が、「501題竹床子」に「應是商人留別去、自今遷客著相將」の句が見える。

○悲愁…悲しみうれえる。『白氏文集』「早入皇城贈王留守僕射詩」に「城柳宮槐謾搖落、悲愁不到貴人心」の例が見える。『漢

語大詞典』では「悲傷憂愁」と説明し、『楚辞』「九辨」の「離芳藹之方壯兮余萎約而悲愁」の用例を引く。『菅家後集』「497種菊」に「不計悲愁何日死、堆沙作壇萩編垣」の句が見える。

○陰夜…暗夜。暗い夜。山本登朗氏は、以下に挙げる白詩を引きながら〈ここでは月の出ない闇夜をいう。（中略）だとすれば、この詩は、「月明」の夜を詠んだ「灯滅二絶・其一」とは別の時の、別の状況を詠んでいることになろう〉と推論されている。（日本漢詩人選集1『菅原道真』小島憲之・山本登朗共著。一七〇頁）この中で指摘されている白詩とは「2302對火翫雪」の「火是臘天春、雪爲陰夜月」の句である。句意は「火は寒中の春というべく、雪は暗夜の月とも言うべきである」となろう。ここで言う「陰夜」は「月の出ていない闇夜」を意味する。又この語に、詩題「燈滅」の語感を響かせていると考えられる。

○倍…ふやす。増す。加わる。重なるの意。

○冥冥…▽暗いさま。▽奥深く遠いさま。▽天地万物の根源等の意味がある。『漢語大詞典』では「▽高遠貌　▽幽深貌　▽沈黙不語貌」等の説明がある。白詩に用例を求めると「0005夢仙」には「半空直下視。人世塵冥冥」（半空から見下せば、下界は塵霧がもうもうとして暗く）の句が見え、「0542早祭風伯。因懐李十一舍人」には「夙興祭風伯、天氣曉冥冥」（朝早く風の神を祭る時、外は暁のうす暗い中であった）の句が見え、いずれも「暗いさま」の語意で使われている。一方「0105答四皓廟」には「先生如鸞鶴、去入冥冥飛」（先生は鸞鶴（らんかく）のように、天空に飛ぶかのようであった。）の句が見え、「0053立中有一士二首」には「勿矜羅弋巧。鸞鶴在冥冥」（網でも矢でも捕えることは出来ない。〈何故なら〉鸞鶴と同じように空高く飛んでいるから）の句が見え、この二首の例は「奥深く遠いさま、高遠のさま」を含む語意と考えられる。菅原道真の用例として『菅家文草』に二例を挙げることが出来る。一つは「86傷巨三郎、寄北堂好事」に「我今収涙訴冥冥、何不慈遺一後醒」の句である。ここでの「冥冥」は、「天地万物の根源たる神」の意で使われている。つまり「天道」の語意と思われる。あと一つは「215早春閑望」に「早起灰心坐、冥冥是夢魂」の句である。この句での「冥冥」は「あたりがまだ夜が明けきれず暗い」の意として使われている。この「燈滅二絶―二」の四句目の「冥明理」の「冥冥」は「暗く、人知れず心にわだかまっているもの」の意味として使われているのに対し、「訴冥冥」の「冥冥」は、『菅家文草』「86傷巨三郎、寄北堂　好事」で指摘した用例と同じく「天地万物の根源たる神、天道」を意味している語と考えられ、この二つの使われる語意には相違がある。

ここでも、敢えて同語（意味は異なる）を使っているのは前にも記したように詩題の「燈滅」との関わりを強く意識した句作りがなされているからだと思われる。山本登朗氏は〈この二篇の連作、内容は暗く重いが「其の一」の第三句や「其二」の第一・第四句には知的な言語遊戯ともいうべき技巧が見られる。〉と指摘されている。（日本漢詩人選集Ⅰ『菅原道真』小島

憲之・山本登朗共著　一七一頁）

補説

○一句目「秋天未雪地無螢」の表現内容について

先学により既に指摘されている[2]ところだが、「螢」「雪」については以下に記すような典故・故事を踏まえていることを整理してみる。

【螢】

初学記　・禮記月令日、季夏之月、腐草爲螢。（中略）一名宵燭、腐草之食蚊蚋焉。照書　續晉陽秋日車胤家貧無油、以絹襄聚螢火以照夜〈螢第十四〉（傍線筆者）

藝文類聚　禮記日、季夏之月、腐草爲螢、飛蟲螢火也、（中略）續晉陽秋日、車胤字武子、學而不倦、家貧、不常得油、夏日用練囊、盛數十螢火、以夜繼日焉〈巻九十七　蟲豸部・螢火〉

蒙求　一九四車胤聚螢

晉車胤字武子、南平人。恭勤不倦、博覧多通。家貧不常得油。夏日則錬囊盛數十螢火。以照書、以夜繼日焉。〈新釈漢文大系『蒙求』上　四六〇頁～四六一頁〉

道真の一句目の「地無螢」の「螢」の用字については、今列記した典故を踏まえた上で次の二点に注目する必要があると思う。

（1）

●「螢」は晩夏から初秋にかけての景物である点

日本においては「初夏」の風物として「螢」をとらえているが、中国においては先に引用した『初学記』『藝文類聚』におさめる『礼記』の一文「季夏（＝晩夏の陰暦六月）之月、腐草が化して螢となる」とあることからわかるように「秋」の景物として詠まれている。例えば『白氏文集』「0675旅次景空寺、宿幽上人院」と題する詩には三句目に「秋雨病僧閑」とあり、六句目に「螢飛廊宇間」の句が見える。又、同じく「3081涼風歎」に「昨夜涼風又颯然、螢飄葉墜卧床前、逢秋莫歎須知分、已過潘安三十年」の句があり、いずれも「秋」とセットで詩におり込まれている。道真の場合も、一句目の「地に螢無し」を、上の「秋天」「未だ雪あらず」の流れで取らえると、「螢」を中国の典故を踏まえた「秋」の景物として認識していたことが判明する。

（2）

●「螢」に『蒙求』「車胤聚螢（しゃいんしゅうけい）」の故事が投影されている点。

これは既に引いた所であるが、『漢詩の事典』「螢」の項で次のように説明されている一文がある。

螢に対する初期のイメージは、この車胤の故事とは遠く隔るものであった。『礼記』の「月令」篇の季夏（晩夏の陰暦六月）の条に「腐草、螢と為る」とある。つまり螢とは腐った草からわき出す虫なのである。また『詩経』豳風「東山」に「熠燿、宵行く」〔33〕の句があり、これに対する伝統的な注釈（「毛伝」）に、「熠燿は燐なり、燐は螢火なり」とある。「燐」とは死屍が放つ光、いわゆる鬼火のことである。螢がこうした陰気な世界からようやく脱皮したのが、先述の「車胤聚螢」における螢の用例なのである。その後南北朝時代になると螢は貴族文学の中にも市民権を認められた、洗練された題材となってゆく。

（松浦友久編『漢詩の事典』大修館書店　六七〇～六七一頁）

【雪】

初学記　映雪　宋齊語曰、孫康家貧、常映雪讀書、淡交遊不雜。〈巻第二　雪第二〉

藝分類聚　孫康家貧、常映雪讀書、清介交遊不雜（〇本條初學記二御覽十二引作宋齊語此脱書名）〈天部下　雪巻二〉

蒙求　一九三　孫康映雪

孫氏世録曰、康家貧無油、常映雪讀書、少小清介、交遊不雜、後至御史大夫。（新釈漢文大系『蒙求』上　四六〇頁）

●「秋天未雪」の表現について

「秋天未雪」は、白詩周辺で新しい詩の題材として注目された「秋雪」を踏まえた表現という指摘が先学よりなされている。（小島憲之・山本登朗共著『日本漢詩人選集Ⅰ　菅原道真』一六八～一六九頁）

その詩群を以下に挙げてみる。

白氏文集

2624　和劉郎中望終南山秋雪

遍覽古今集　遍く古今の集を覽るに
都無秋雪詩　都て秋雪の詩無し
陽春先唱後　陽春先づ唱へて後
陰嶺未消時　陰嶺未だ消えざる時
草訝霜凝重　草には霜の凝って重きかと訝り
松疑鶴散遲　松には鶴の散ずること遲きかと疑ふ
清光莫獨占　清光獨り占むる莫く
亦對白雲司　亦對す白雲の司

＊本文は『白居易集箋校』朱金城箋校に拠る。

＊訓は『續國譯漢文大成　白楽天詩集』に拠る。

この白詩は八句目で「白雲司」とあるように、大和二年（八二八）白居易五十七歳、刑部侍郎の時、長安で詠んだ作。詩題

に言うように劉禹錫の「終南秋雪」という以下の詩に和したものである。

南嶺見秋雪。千門生早寒。
閒時駐馬望。高處卷簾看。
雲散瓊枝出。日斜鉛粉殘。
偏宜曲江上。倒影入　瀾。

白居易は、劉禹錫より、終南山に降った秋雪の景を詠んだ右の詩を手にし、まず一、二句目で、「古今の書をひもとくが、秋の雪を詠んだ詩は一首も見当たらない。（〝秋雪〟の詩語はこの君の詩より始まる）」と詩材の斬新さをほめる。そして五、六句で「終南山」に積もる「秋雪」の景を「霜」「鶴」の例えをあげながら描写する内容の作品である。道真が一句目で「秋天未だ雪あらず」と詠う背景には、この劉禹錫と白居易の「秋雪」の和詩の存在があることを想起すべきだと考える。

注

（1）

拙稿「菅原道真研究『菅家後集』全注釈（二）」
熊本大学「国語国文学研究」三十六号

拙稿「菅原道真研究『菅家後集』全注釈（三）」
「有明工業高等専門学校紀要」三十七号

拙稿「菅原道真研究『菅家後集』全注釈（三）」
九州大谷短期大学「九州大谷情報文化」二十九号

（2）

○川口久雄校注岩波日本古典文学大系『菅家文草・菅家後集』頭注　五二一頁

○小島憲之・山本登朗著日本漢詩人選集Ⅰ『菅原道真』（研文出版）一六八～一六九頁

○小島憲之編『王朝漢詩選』（岩波文庫）二五一～二五二頁

○渡辺秀夫著『詩歌の森―　日本語のイメージ　―』（大修館書店）
Ⅰ光り輝くものたち―沈黙の秩序―
「螢」四十九～五十一頁

追記

この稿を草するにあたり、木下文理氏より多大の御助力をいただいた。とりわけ語釈・白詩中の詩語の検索等にお力添えをいただいた事に深謝申し上げたい。

二〇〇一年　十一月一日　執筆了

（やきやま　ひろし／大学院七回修了・有明高専）